
菌に愛された少女

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

菌に愛された少女

【Nコード】

N1668J

【作者名】

YSR

【あらすじ】

目が覚めると、私は菌が見えるようになっていた！戸惑いながらも私は菌との日常を過ごしていく。北上高校で織りなす女子高生版「もやしもん」！

第1話 菌に愛された少女（前書き）

あらすじにも書いてますが、かなり「もやしもん」を意識した作品となっております。とは言っても、沢木とかは出てきません。実質、「菌」のみです。

なので、これって、ファンフィクション（同人）・・・なのかなあ・・・。

（学名って、著作権無いよね!？）

まあ明らかにそっちの影響は受けているので、ファンフィクションとしましたが。

それでは、菌が織りなす学園物語、お楽しみください。

第1話 菌に愛された少女

—

そこは草原。見渡すばかりの緑。空は青く、時々雲が浮かんでいる。

私はそこに立っていた。広い広いその場所で、日々の疲れを癒しながら。

風が吹く。気持ちいい風。草の香りがする。

そうして草原を楽しんでいると、ふと下の方から、声がした。

「かもすぞ」

「！！」

私は驚いた。今の声・・・誰？

他には誰もいない草原。聞こえるはずが無い。

そう思いながらも、私は下の方を向いた。

その時気が付いたのだ。

自分が立っているのが、草原の上ではないということが。

「かもすぞー」

「かもせかもせー」

「いえーい」

足元からの声の正体は、そこにある無数の小さな生き物だった。

草のような緑色で、いくつかの突起がある。

その生き物全てがこちらを向いた。

「かもすぞー！！！」

「わぁ！」

私は跳ね起きた。

「夢か・・・」

窓を見る。カーテンが明るい。どうやら朝のようだ。

セットしてあったはずの目覚まし時計を見る。どうやら、タイム
ーが作動する前に起きたらしい。

「せっかく気持ち良い夢を見ていたのに・・・」

私は不機嫌だった。寝起きだからもそうだが、何より途中であんな変な夢になってしまったからだ。

「何よ、あの気持ち悪い生き物・・・」

そう愚痴っていると、目の前で声がした。

「気持ち悪くて悪かったな」

「・・・え!？」

ふと前を見る。すると、そこには、夢で見たのと同じ生き物が、
宙を浮いていた。

「うわっ!」

思わず後ずさりする。とは言ってもベッドの上。背中がベッドの
枠にぶつかるぐらいまでしか後ずされなかった。

「失礼な奴だな。俺達を見て恐れるなんてさ」

「お・・・恐れてなんかないわよ!」

その生き物の言葉に、思わず私はそう言い返した。

「ああそうかい。じゃあ何で後ずさりしたんだよ」

「う・・・」

そう。私の中に、完全に恐怖の気持ちが無い訳では無かった。

「まあいいや。俺達は・・・」

向こうが動きながら喋っている。それも、夢と全く同じ様に。そ
の時私は感じた。

もしかして、これも夢?

そう思うといてもたつてもいられず、私はお母さんと呼んだ。

「おかあさん!」

「なによ里美?どうしたの?」

「今すぐこっちに来て!」

「もう、仕方無いわねえ」

お母さんにこの生き物が見えなかったら、それは現実ではないことになる。そう私は考えたのだ。

階段の音が聞こえる。そして、その音が止まって、ドアが開いた。

「どうしたの里美？」

「お母さん、ここになんか見える!？」

そう言って私は、その緑の生き物を指差した。

母からは、こう返ってきた。

「なに言ってるの。何も無いじゃない」

「え・・・」

「とにかく私は降りるわ。里美も早くリビングに来なさい」

そう言って母は、下へと降りていったのだった。

「ふう・・・」

なんだ。やっぱり夢だったのね。なんでそんなモノが見えるか分からないけど、すぐに消えるだろう・・・。

そう安心していると、その生き物は呆れていた。

「お前なあ・・・」

「え？」

「俺達は別に夢じゃねえぞ」

・・・夢じゃない？ 私はすぐに言葉を返した。

「どうして!？お母さんも見えないって言ってたじゃない!」

「あんなホモサピなんかにや見えねえんだよ。お前と違ってな」

「じゃあ何だっけ言うのよ!？」

そう聞くと、その生き物はこう答えた。

「俺達か？俺達は・・・菌だ」

二

「き・・・菌？」

私は目が点になった。何を言い出すのだろう、この生き物は。

「まだ信じられねえって顔してんな」

「当たり前じゃない！そんな、菌だなんて・・・」

「まあなあ。普通のホモサピに見えねえもんだからなあ、俺達はまあでも」

「？」

「周りを見てみな」

そう言われて、私は周りを見渡した。すると。

「どうもー」

「ご無沙汰ですー」

「ここはかもしやすいなあ」

「うわっ、すげー見られてんぞ俺達」

・・・色々な種類の、沢山の生き物たちが、宙を舞っていた。

「そんな・・・」

私は狼狽した。夢であつて欲しい。そんな小さな希望が、打ち碎かれた瞬間だった。

「で・・・あんたは何なのよ」

私は、その生き物達は現実にいるのだと信じた。と言うより、信じるしかなくろう。実際に、見ているのだから。

「俺か？俺はクリソゲヌム。アオカビってやつだな」

「アオカビって・・・あの、パンとかかびさせるやつ？」

「まあそんなとこだ。適度に湿気を吸ったパンが特にかもしやすくて・・・」

「・・・それ以上はいいわ。次、あんたは？」

私は、宙に浮いていた菌を次々と指差した。すると。

「あたし？あたしはセレビシエ。天然酵母さ」

「私はトリコイデス。まあ、クロカビという者だ」

「僕ススカビー。どんどんふえるぞー」

・・・どうやら、本当に菌らしい。全く聞いたことも無い単語を使うことから、幻覚や幻聴の類ではないのだろう。

そんなことを感じながら、私は制服に着替え、そして、下のリビングへと向かったのだった。

三

「な、ナニコレ・・・」

食卓を見て、私はそう言った。

「どうしたの里美。いつもの朝食じゃない」

「そ、そうよね・・・」

少々口調が変になっていると、自分でも感じた。無理もない。なにせ、目の前には沢山の菌が舞っているのだから。

「食えー」

「いただけー」

味噌汁にはなんか黄色い菌（A・オリゼー等）がいたし、牛乳にも空気中からふらふらと菌が今沈み込んだ。そして空気中には、当然のようにカビとかが浮いている。

箸が進まないでいると、口から大量の菌を吐き出しながら、お父さんが話しかけてきた。

「どうした里美？食べたくないのか？」

まあ半分以上事実だが、変な心配はかけなくなかった。

「うつん。別に。今食べるから」

そう言っただけで私は、箸でご飯をすくい、口元へ持ってきた。しかし。目の前のぷにぷにする生物が、やはり気になる。さすがに嫌気が差したのか、彼らの方が私に勧めてきた。

「なにためらってんだ」

「スペランカーよろしくすぐ死ぬのが俺たちの宿命さ」

「どーせ子孫は空気中にいくらでも残してんだ」

「今まで普通に食ってただろ？さあ食え」

流石にそこまで言われたら食わないわけにはいかない。私は、彼ら付きのご飯を口に放り込んだ。

そこからはスムーズに進んだ。

朝食を完食し、菌入りの牛乳を飲み干した。
そう。私ははっきりと悟ったのである。

こいつらは、スルーするのが吉、と。

第1話 菌に愛された少女（後書き）

えー、新連載です。

ネタは前もって考えてたものなので、こうして書けるのはなかなか楽しいです。

・・・あ。次回予告です。

「敵か味方か！？新人物『西門』登場！菌に勉強に恋愛に生きる里美の運命はいかに！？」

内容は突然変更になる場合があります。

第2話 菌が舞う日常（前書き）

・・・あー、前回予告と内容が多少変更になったことを、ここに
お詫び申し上げます。それでは、どうぞ。

第2話 菌が舞う日常

—

「行っ てきまーす」

「行っ てらっ しゃい」

私の呼びかけに、母は、いつものように答えた。

勿論母は気が付いていなかったが、私は、玄関まで迎えた母だけに呼びかけたのではなかった。

「無事に帰ってこいよー!」

「がんばれよー!」

・・・菌達にも、である。

いつもの路地。いつもの近所。昨日までとなんら変わる事無い風景。

しかし、今日は違った。

「気をつけて行っ ておいで」

そう言う近所のおさんの周りには、常在菌と土壌菌とが漂っていた。

「・・・うん!」

しかし、私は気にしない。なぜなら、そう言う自分自身こそが、菌まみれなのだから。

数え切れないほどいる菌。しょっちゅう私に話しかけてきた。

「おはよー」

「元気にやっ てるか?」

「たまには彼氏連れてけー」

・・・ほっ とけ。

まああまりの数だ。正直、前が少々見づらい。例えるならば、まばらにノイズが見える映像を見せられている気分だ。

一度叫んでみた。

「邪魔よ！退いて！」

・・・すると。

「うるせーなー」

「見えてるからって毛嫌いするなよ」

「風で飛んでくー」

・・・意外とすんなり、飛んでいってくれた。一部、呼び声とは関係ないのがいたが、気にしないことにしよう。

少しクリアになった前を少し歩くと、近所に住む同級生の、上野紗奈と出くわした。

「おっはよー里美」

「・・・おはよう」

「どーしたのー？元氣無いねー」

そりゃそうだろう。

こつも邪魔な物体（菌）が見えるようになってしまったのだ。気もめげる。

とは言えそれは、今友人に言うことでは無いだろう。

私は話を逸らせにかかった。

「な、何でも無いよ！・・・あ、そういえばさ、紗奈の方はどうなの？」

「どうなのって？」

「ほら、あの瀬川君のことよ。時々、本を貸し借りしてるんでしょ？」

「別に何も無いよー」

「ホントにー？」

「何も無いってー」

「このこのー」

私が紗奈をイジる時、良く見ると、紗奈の周りの菌も同様にイジっていた。

「ホントか上野ー」

「仲いいじゃんか、ごまかすなよー」
「いつちやえいつちやえー」
そんな奴らの姿を見ると、余計にニヤニヤしてしまう私なのであった。

二

そんなことをしているうちに、駅に着いた。

「えっと、定期定期・・・」

そう言っただけで私は、ポケットから生徒手帳を取り出し、そこから定期券を取り出した。

当然、長く使っているだけあって、それには大量の菌が付着していた。

「うつ・・・」

・・・まあ、気にしない気にしない。

「どうしたのー？」

「いや、別に・・・そう言えば期限はいつまでだったけっね」

「そうだよー。里美、前に期限切れて泣く泣く券売機に並んで切符買ったことあったもんねー」

「そんなこと今言わないでよ！」

テレながら私は、定期券を改札に通した。

その時。こんな声が聞こえた。

「モネラ、いつきまーす！」

いつものように前の扉が開き、私は改札を通過した。

隣の改札を通過した里美と合流して、いつも乗る電車が来るホームへと向かった。

「・・・うわあ・・・」

思わず、目の前の風景から目を背けたくなった。

「・・・どーしたの？」

・・・言えない。これは言えない。てか、言うべきではない。

何億もの菌が飛び回るこの空間の記憶は、私の心の中だけに封じ込めておこう。

まあ、気にしない・・・気にしない。

しばらく待っていると、電車が向こうからやって来るのが見えた。

「来たねー」

「来たねー・・・あ」

・・・ま、まさか・・・。

私は、恐ろしいことに気が付いてしまった。

「やば・・・」

思わず口走っていた。

「どうしたのー里美？顔、青いよ？」

「い、いや、何にも・・・」

嘘である。

電車がホームに到着した。扉が開く。

その瞬間、ホームの何十倍もの密度の菌が目の前に漂ってきた！

「！！」

思わず私は目をつぶった。

「・・・どうしたの？」

「いやっ！何でもないっ！」

気・・・気にしない！気にしないっ！！

菌のせいではほとんど前が見えない車内の中で、私はこう思った。

・・・もう嫌・・・！

三

・・・一センチ先も見えないような車内の中で、私はまるで永遠のような十分間を過ごした。

最寄り駅に着いた。扉が開き、その地獄の空間から開放される。

「・・・疲れた・・・」

「・・・大丈夫？確かに満員電車って疲れるよねー」

「・・・それもそうだけど・・・」

「？」

菌が見える。まあ、朝起きた時から予測はしていたが、これほど負担がかかることだとは。

「慣れたらいい」

最初はそう思っていた。・・・しかし。

「心を病んだりしないだろうか」

今は、そんなことも考えてしまう。

「・・・大丈夫か？」

はっ、気づかれたか。

私は、声のした方を向いた。・・・しかし。

そこにいたのは、紗奈ではなかった。

「お前・・・あれぐらいでめげるなよー」

「スルーすんじゃないのかよ」

・・・菌か。どうやら、常在菌の他に、クリソゲヌムが数匹、ついてきてしまったらしい。

「・・・あんた達、なんでいるのよ・・・」

思わず問いかける。

「そりゃ、お前が気になるからさ」

「！」

私は驚いた。菌でもそんなことを言うのか、と。

「今更驚くなよ」

「だって・・・」

「人間以外の生き物だって、案外『愛着』とか感じてるもんなんだけ？」

「へえ・・・」

菌も、面白いことを言うじゃないの。

そんなことを感じながら喋っていると、また別の声がした。

「里美どうしたのー、ぼーっとしちゃって」

「え、いやなんでも・・・」

あぶないあぶない、菌は私以外には見えなかったんだった。・・・あれ？

私は菌に聞いた。

「もしかして・・・私達の声も、周りの人には聞こえない？」

「当たり前だろ？でなきゃお前、ただのイタイ女子高生だぞ」

「・・・うるさいわね」

・・・いつも一言多いような気がする。

四

そして、やっと学校。

地獄の満員電車を体験したせいか、学校の校門や玄関などまるで天国に見える。

私は、靴箱で靴を履き替え、自分の教室に入った。

・・・すると。

「・・・うわ」

別に、菌の量に驚いたのではない。その種類が、見事にグループ分けされていたのだ。

自分や紗奈らのグループと、それ以外のグループとは明らかに「違う」。普通の人でもなんとなく感じることを、私はその目ではつきりと認識したのだ。

「・・・な？便利だろ？」

近くに浮遊していた菌が問いかける。

「・・・カビに言われても嬉しく無いわよ」

「おおっ！良く知ってるねえ姉ちゃん！なんでカビだと分かるんだい？」

「お前はおっさんかよ・・・そんなの、どこにでもいるからに決まってるじゃない」

そう。家の中、それなりに掃除をしていても飛んでいるものなのである。それを、何も知らずに吸い込んで平気でいられるのが人間なのだ。

「確か、ススカビ・・・とか言ってたわね」

「その通り！俺達は実質この学校を支配してるんだよ！」

「・・・妙にテンション高くない？」

「あつたりめえだろ！気温・湿度・人、三拍子そろった、病院並みに『天国に一番近い場所』なんだぜ！？」

「・・・語弊を生むからやめなさいよその言い方」

「そんな掛け合いをしていると、チャイムが鳴った。」

「おおつ、そろそろ授業か。それじゃーなー」

「おー・・・」

去った菌に、思わず挨拶をしてしまった。慣れるの、早すぎだろ
うか？

・・・いや、早すぎたのである。

それは、1時間目のことであつた。

第2話 菌が舞う日常（後書き）

満員電車・・・大変です。

気をつけないと、周りに囲まれて、身動きが取れなくなるときも・

・・・！

冬は暖かい・・・どころか暑くなるので要注意です。

・・・あ。次回予告です。

「里美に忍び寄る不穏な影！里美は無事に、西門君の家までプリン
トを届けることが出来るのか！？」

内容は変更になるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1668j/>

菌に愛された少女

2010年10月10日15時44分発行